

美をつくし



《金銅 舟形光背断片》(部分)

vol. 192

大阪市立美術館だより
令和元年9月1日発行

MI WO TSUKUSHI
WI MO TSUKUSHI

仏像 中国・日本 中国彫刻2000年と日本/北魏仏から遣唐使そしてマリア観音へ

2019年10月12日(土)―12月8日(日)



1



2



3



4

悠久の歴史を刻む中国の仏像。それを受容してきた日本の視点で読み解きながら通観する特別展を開催します。日本にはいつの時代にも中国でつくられた多くの仏像や仏画が舶載され、それらが日本の仏像のすがたに大きな影響をあたえてきました。

本展は、まず中国に仏教が伝来する以前の「1 古代の人物表現 戦国～漢時代」からはじまります。そして南北朝時代を中心とする「2 仏像の出現とそのひろがり」、「3 遣隋使・遣唐使の伝えたもの」、「4 禅宗の到来と〈宋風〉彫刻」と時代順にすすみ、最後に隠元が伝えた黄檗のほとけや潜伏キリシタンが信仰のよりどころとした仏像からなる「5 新たな仏教・キリスト教との出会い」の各章で構成しています。

中国南北朝時代から明・清時代にいたる仏像の移り変わりを、関連する日本の仏像と共にご紹介いたします。

(齋藤龍一)

※一部展示替を予定しております。詳細は当館ホームページでご確認ください。



5



6

1	重要文化財	銀製	男子立像	戦国時代	東京・永青文庫
2	重要文化財	銅製	画文帯仏獣鏡	晋時代	京都国立博物館
3		石造	如来三尊像	西魏大統八年(542)	大阪市立美術館
4	重要文化財	木造	十一面観音菩薩立像	唐時代	山口・神福寺
5		木造	観音菩薩坐像	南宋時代	京都・仁和寺
6		白磁	マリア観音坐像	清時代	福井・青蓮寺

オーバリン大学アレン・メモリアル美術館所蔵

メアリー・エインズワース浮世絵コレクション ― 初期浮世絵から北斎・広重まで

2019年8月10日(土)―9月29日(日)

アメリカ・オハイオ州にあるオーバリン大学のアレン・メモリアル美術館には、アメリカ人女性メアリー・エインズワースが寄贈した1500点以上の浮世絵版画が所蔵されています。このコレクションは、明治39年(1906)のエインズワースの来日を契機として始められたもので、初期から幕末まで浮世絵の歴史をたどることができるうえ、有名浮世絵師の名品を含む優れた内容となっています。

稀少な初期浮世絵や葛飾北斎の赤富士なども本展の見どころの一つですが、なかでも特筆さ



れるのはコレクションの半数以上を占める歌川広重の作品です。代表作である「東海道五拾三次之内」はもちろん、晩年の「名所江戸百景」に至るまで、情趣あふれる広重の揃物が丹念に収集されています。広重が描く風景は、日本を訪れたエインズワースにとって、一層愛すべきものだったのかもしれませんが。美人画や風景画など、女性らしい視点によりコレクションされた優品の数々をぜひご覧ください。

(秋田達也)

歌川広重 《名所江戸百景 浅草田圃西の町詣》安政4年(1857)

「九曜紋浮舟蒔絵匂箱」について

たち花の小嶋は色も変らじを この浮舟ぞゆくへ知られぬ

匂宮に伴われた浮舟が、宇治川対岸の留守居に向かう舟中で詠んだ歌である。白々と雪の降り積もり、有明の月の澄み渡る折、2人が川中にある橋の小島に目をやれば、趣のある常磐木が繁っている。いつまでも青々と繁る木に、匂宮の変わらぬ心を重ね合わせるも、薫と匂宮に思いを寄せられ煩悶していた浮舟は、水に浮かぶ舟のように行く末も知れない胸中を吐露するのであった。(『源氏物語』第五十一帖「浮舟」)

さて、本館蔵「九曜紋浮舟蒔絵匂箱」は、この源氏物語を意匠化したもので、U.A.カザール氏よりともに寄贈された九曜紋蒔絵婚礼調度(全24件※)と一具をなすと考えられている。このうち源氏物語を題材とする調度は、おもに「浮舟」に取材した匂箱と、「紅葉賀」「夕霧」に取材した手箱の2件が存在するのみである。さらに伊勢物語を題材とする硯箱を除けば、常緑の吉祥文様である松橋を蒔絵している調度類が過半数を占める。意匠を異にしなが、いずれも九曜紋を有する婚礼調度群とみなされているが、家紋から所用者を特定することは難しく、来歴は定かではない。ここでは匂箱における意匠や技法を中心に紹介しよう。

匂箱は香道具をおさめるための長方形、四方入角、合口造の箱で、手提香盆、橐形香合、入角重香合、角切重香合、壺形焚殻入、竹幹形三足香炉をおさめている。薫物に心を砕いた匂宮と匂箱とを掛けたのだろうか。

蓋表には御殿に2人の男性、身の正面には馬上の男性と3人の付人たち、裏正面には舟に乗る男女と舟人を描いている。話の筋から、こちらを向いて御殿にたたずむ男性と

馬上の男性とは同一人物であり、人目をはばかって浮舟に会いに行く匂宮の姿を描いていると思われる。一連の話は、浮舟の立場からすれば悲劇の一言に尽きるものの、匂宮の立場からすれば、思慕する女性を宇治に尋ねる恋愛譚といえるだろう。明暗の分かれる物語は婚礼調度の意匠としてふさわしくないようであるが、源氏物語は中世を通じて物語の内容から離れ、和歌や登場人物は意匠化してきている。そして匂箱に限らず方形の立体物に表す題材は、その箱の顔ともいえる蓋表(と蓋裏)や身の正面

に配することが比較的多い。しかし、本館蔵の匂箱は身の裏正面に浮舟を蒔絵している点で興味深い。表沙汰にできない逢瀬であるがゆえに裏正面に蒔絵しているのだろうか、あるいは蓋表と身の正面は浮舟とは異なる帖に拠っているのだろうか、残念ながらこれらを示す目録などはない。

ところで、同様に源氏物語の各帖に取材し、登場人物を描いた作例は少なからず存在しているようで、東京国立博物館蔵「源氏

蒔絵沈箱」「源氏蒔絵櫛箱」「胡蝶蒔絵鏡台」「源氏蒔絵鏡箱」「源氏蒔絵搔上箱」であるとか、平山堂の「創業三十五週年記念展観入札會」(東京美術倶楽部 昭和7年[1932])所収の作例が知られる。中世では文学作品などの登場人物を直接描かずに景物を蒔絵する「留守模様」の手法をとることが多いが、近世以降、人物を直接描く作例も現れるようになる。類例はこれにとどまらないはずで、今後も調査が必要である。

技法に注目すると、匂箱の総体に濃い梨子地を蒔きつけ、御殿、人物、前栽、岩などを高蒔絵し、宇治川の波を研出蒔絵と付描とで表している。岩や木の洞には金属板を凹状に嵌め込む極込や、凸状に貼り付ける臍をほどこし、雲や岩などには方形の金銀切金を置いてアクセントとしている。今でこそ土坡や岩上の銀切金は黒ずんでみえるが、当初は白銀のごとき雪を表していたのだろう。

蓋表には九曜紋を3つ、身の四方には2つずつ、計11の紋を散らしている。さらに身の長側面には、金銅製魚々子地の紐金具に九曜紋を彫り表している。なお、紐金具に結ばれていたと思われる紫房の紐は、箱内に保管されている。ここでは内容品に関する詳述を控えるが、いずれも濃い梨子地に手の込んだ技法を駆使しており、格式の高い香

道具といえる。管見の限り、本館蔵の匂箱は意匠表現や技法などから、江戸時代初期まで遡らず、中期の作と思われる。今後、より詳しい技法研究が必要になるだろう。

匂箱には謎が満ちている。行き着く先はどこか、答えを探す舟旅は今始まったばかりである。

※作品数は数え方により異なる。

(菊地泰子)



(上)九曜紋浮舟蒔絵匂箱 (中)正面 (下)裏正面
江戸時代中期 20.8×24.0×17.7 (cm)
本館蔵(カザールコレクション)

生誕150年記念

船場の絵描き 庭山耕園 — 近代大阪の四条派 —

2019年12月18日(水)－2020年2月9日(日)

庭山耕園(1869－1942)は、明治2年に姫路で生まれ、大阪の船場を中心に活躍した絵師です。四条派の上田耕冲(1819－1911)に師事し、写生を基本に季節感あふれる瀟洒な花鳥画を多く描きました。床の間に飾られ、部屋との調和が大切にされた耕園の作品、いわゆる「床映り」が重視された作品は、大阪の人々に広く親しまれました。

生誕150年を記念し、館蔵・寄託の作品により耕園の画業をご紹介します。近代大阪が育んだ船場文化の風情をお楽しみください。



(左)
庭山耕園
《雨中燕子花図》
近代
本館蔵(庭山慶一郎氏寄贈)

(右)
庭山耕園
《八重桜五雀図》
大正14年(1925)
本館蔵(庭山慶一郎氏寄贈)

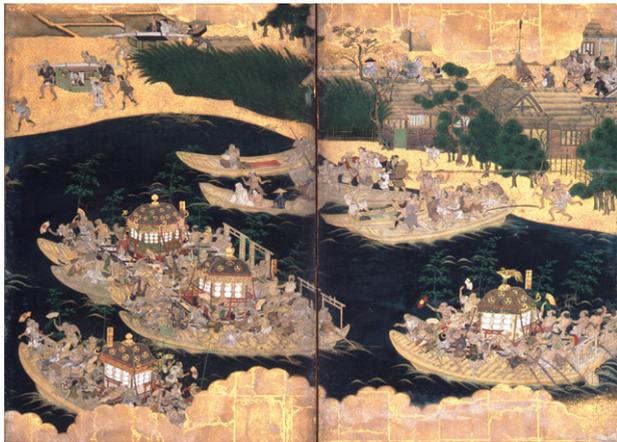
コレクション展

2019年10月14日(月)、11月4日(月)開館

屏風祭り2019

2019年10月12日(土)－11月24日(日)

屏風には、複数のパネル(扇)でひとつの大画面を構成する作品のほかに、色紙、扇面、短冊など多数の小画面を散らした「貼交」や、パネルごとに独立した図を貼る「押絵貼」があります。中・近世の多彩な屏風の形式とそれぞれの魅力をご鑑賞ください。



《日吉山王祭礼図屏風》(左隻・部分) 江戸時代・17世紀 京都・金地院蔵

画中人 中国の人物画

2019年10月12日(土)－11月24日(日)



王震 《東坡抱研図》(部分)
清時代・光緒21年(1895) 本館蔵

人の姿を描くことは芸術に普遍的なことであり、中国絵画においても非常に長い伝統を持っています。画中にあらわれた人物は、自然と鑑賞するわたしたちの目を引きまします。人の姿といっても、神仙や儒仏の聖人、英雄や偉人、説話の登場人物や美人などさまざまです。本展では館蔵・寄託の人物画の逸品をご紹介します。

誰が袖 工芸・絵画

2019年10月26日(土)－12月8日(日)

衣桁や屏風に掛けられた着物、ゆるやかに立ちのぼる香炉の煙、誰もいない室内。「誰が袖」と称する題材は、こうしたプライベート空間を垣間見て、着物に薫きしめられた香りを想像し、その場にはいない誰かに思いを馳せる趣向を備えています。本展では、中・近世の漆工を中心に、描かれた衣裳の華やかさを見所のひとつとする絵画や染織などもお楽しみください。



《白綸子地海賦文様小袖》
江戸時代・18世紀 本館蔵

うるわし漆椀 朱・黒

2019年10月26日(土)－12月8日(日)

漆は堅牢性、殺菌性に富む天然の樹脂塗料です。その優れた性能は人の生活に深く息づき、食卓を彩る飲食器にも適うものでした。今回は江戸時代を中心とする漆椀を紹介するとともに、根来や漆絵などに通有する、大らかな塗りや加飾技法の世界もご覧に入れます。



《二重亀甲花菱紋散蒔絵椀》
江戸時代・19世紀 個人蔵

莊嚴供奉 — 仏教工芸の世界 —

2019年10月26日(土)－12月8日(日)

特別展「仏像 中国・日本」の開催にあわせて、仏教工芸の世界を館蔵・寄託の金工品を中心にご紹介します。寺院内の荘嚴や仏具・法具として用いられた様々な器物を、その用途や造形に注目しながらご堪能ください。仏像や仏画とともに、館内が仏教美術の殿堂と化する機会をどうぞお見逃しなく。



《金銅「二月堂」銘香水杓》
鎌倉時代・13世紀
本館蔵(田万コレクション)

仏教絵画 中国・日本

2019年10月26日(土)－12月8日(日)

特別展「仏像 中国・日本」にあわせ、大陸で制作された仏教・道教の絵画や経典、また日本において大陸風を意識して描かれた作品などを中心に展示いたします。こうした作品のなかには類似する作例があまり知られていない、珍しいものもあります。この機会に、これまでなかなか陳列が叶わなかった作品をご覧ください。

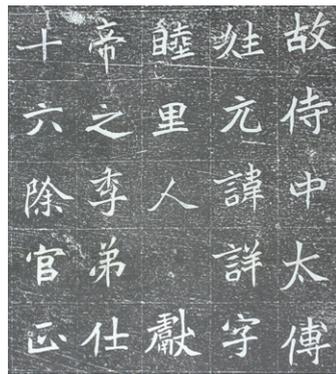


《太上洞淵神呪経》巻第19(部分)
明時代・16-17世紀 奈良・薬師寺蔵

中原の古法 — 北朝石刻書法 —

2020年2月22日(土)－3月22日(日)

439年から589年の間、中国では南北に王朝が並立し、南北朝時代と呼ばれます。南朝の優美な書とは異なり、北朝では隸書から独特の雄渾な楷書が発達し、隋・唐時代の整った楷書に連なります。碑・墓誌・造像銘・摩崖などの石刻に遺された、北朝書法の多様な姿をご覧ください。



《元詳墓誌》(部分) 北魏・永平元年(508)
本館蔵(師古齋コレクション)

明器 — 古代中国 墳墓のやきもの —

2019年12月18日(水)－2020年2月9日(日)



《加彩 駱駝》北魏・6世紀 本館蔵

古代中国では、墓を靈魂の住まいと考える死生観から、広い地下空間をもつ墳墓が築かれました。そこには、死後も生前と変わらぬ豊かな生活ができるようにとの願いを込めて、祭祀用の器物や家財のミニチュア、人形などの明器が副葬されました。本展では、これらの副葬されたやきものをご紹介します。

春爛漫 花咲くやきもの

2020年2月22日(土)－3月22日(日)

描いたり、彫ったり、造形をかたどったり——古来より花はやきものの定番意匠として、写実的なものからデザイン化したものまで、さまざまに表現されてきました。本展では、



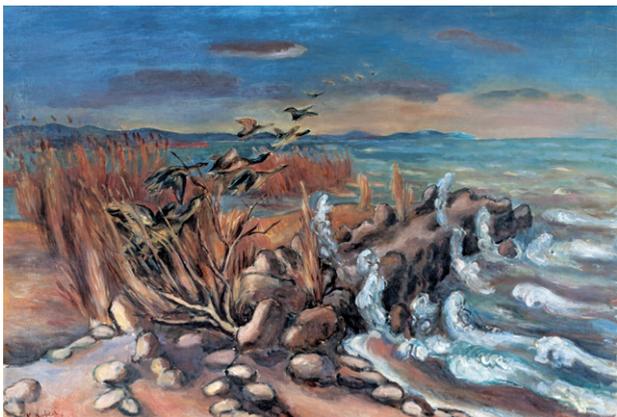
《青花 花唐草文鉢》景德鎮窯
明時代・15世紀 「大明宣徳年製」銘 本館蔵

唐三彩、マイセン、富本憲吉など館蔵品を中心とした古今東西のやきものを展示いたします。春めく季節、やきものに咲いた花々をお楽しみください。

没後50年 鍋井克之

2019年12月18日(水)－2020年2月9日(日)

鍋井克之(1888-1969)は小出楯重らとともに二科展で活躍した大阪市出身の洋画家です。戦前から戦後にかけて長らく関西洋画壇をけん引し、また随筆家としても活躍しました。重厚な作風で知られる風景画の代表作、これまで未紹介の関係資料など館蔵品によりその画業を振り返ります。



鍋井克之 《鴨飛ぶ湖畔》 昭和7年(1932) 本館蔵(鍋井澄江氏寄贈)

画中游 中国の山水画

2020年2月22日(土)－3月22日(日)

雄大な自然美は、かつて唐の王維が「舟行碧波上 人在画中游」と詠ったように、まるで美しい絵画世界に遊んだかのように人の目を楽しませ、心を揺さぶるものでしょう。一方で山水画は、観る者の胸中に実際にその場に訪れたかのような感動を呼び起こしてくれます。本展では館蔵・寄託の山水画の優品をご紹介します。



米万鍾 《山水図巻》(部分) 明時代・万曆34年(1606) 本館蔵

特別展

ルネ・ユイグのまなざし
フランス絵画の精華 大様式の形成と変容
— プッサンからマネまで

2020年4月11日(土) - 6月14日(日)

ルーヴル美術館展、フェルメール展に引き続き、2020年春には、「フランス絵画の精華」と題して17世紀の古典主義から18世紀のロココ、19世紀の新古典主義、ロマン主義を経て、印象派誕生前夜にいたるまでの壮大なフランス絵画の流れをたどる展覧会を開催いたします。

この展覧会は「大様式の形成と変容」というテーマによって、「Ⅰ 大様式の形成、17世紀：プッサン、ル・ブラン、王立絵画アカデミー」「Ⅱ ヴァトーとロココ美術—新様式の創出と感情の表現」「Ⅲ ナポレオンの遺産—伝統への挑戦と近代美術の創出」という時間軸に沿った3つの章から構成されます。時代の経過の中でフランス美術が発展していくさまをご理解いただくことができるでしょう。



ニコラ・プッサン《コリオラヌスに哀訴する妻と母》
1652-1653年頃 油彩・カンヴァス 112×199cm
ニコラ・プッサン美術館 ©Christophe Deronne

所蔵作品の貸出

他館への貸出を予定している当館所蔵作品です。展示期間などの詳細は各施設へお問い合わせください。

小野竹喬《秋陽》(住友コレクション) 笠岡市立竹喬美術館(笠岡市) 2019年9月7日(土) - 11月24日(日) 生誕130年記念 小野竹喬のすべて 第二章 竹喬 至純の時代 1939-1979	
燕文貴《江山楼観図》(阿部コレクション)ほか 計5件 観峰館(東近江市) 2019年9月21日(土) - 11月17日(日) 中国山水画の精華	
鍋井克之《立岩の海岸》ほか 計16件 池田市立歴史民俗資料館(池田市) 2019年10月11日(金) - 12月1日(日) 富貴のひと—画家・鍋井克之一	
《七宝十字架》ほか 計2件 大阪城天守閣(中央区) 2019年10月12日(土) - 11月17日(日) 豊臣外交	
《春日鹿曼荼羅》ほか 計6件 滋賀県立安土城考古博物館(近江八幡市) 2019年10月12日(土) - 11月24日(日) 動物たちと生きる(仮称)	
《洛中洛外図屏風》(田万コレクション) 五島美術館(世田谷区) 2019年10月26日(土) - 12月8日(日) 美意識のトランジション	
森田恒友《ブルーターニユの風景》ほか 計2件 福島県立美術館(福島市) 2019年11月23日(土・祝) - 2020年1月19日(日) 森田恒友展 ※埼玉県立近代美術館にも巡回	

ギャラリートーク

コレクション展の会期中、担当学芸員によるギャラリートークを行います。この機会にぜひご参加ください。

10月13日(日)	「屏風祭り2019」
10月26日(土)	「画中人 中国の人物画」
10月27日(日)	「仏教絵画 中国・日本」
11月23日(土・祝)	「荘厳供奉 — 仏教工芸の世界—」
12月 8日(日)	「うるわし漆椀 朱・黒」

- 所要時間 いずれも11時より15分程度。
- 参加無料(ただし、当日観覧料が必要)
- 今後のギャラリートークスケジュールは当館HPをご覧ください。

イケフェス大阪2019

当館は今年も「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪(イケフェス大阪)」に参加いたします。10月28日(月)にイケフェス大阪アフターイベントとして休館日の美術館を探索するツアーを開催する予定です。参加申し込みやお問い合わせ等、詳細はイケフェス大阪2019公式HP (<https://ikenchiku.jp/>) をご覧ください。

◆表紙作品紹介

《金銅 舟形光背断片》(部分) 奈良時代・8世紀 本館蔵

仏像等の流麗な線刻を施す銅板断片の一部です。二月堂本尊所用と伝える奈良・東大寺の重要文化財《金銅舟形光背》の一部であったことが判明しました。天平美術の貴重な遺例です。

大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

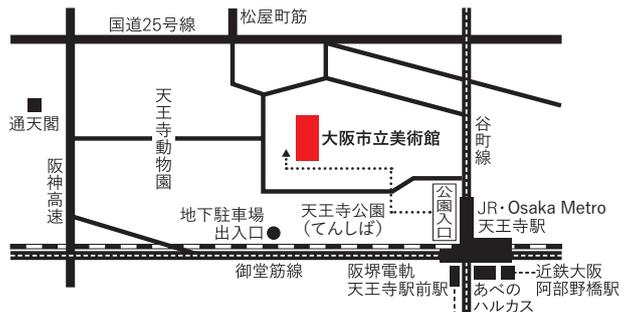
〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82

tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856

<https://www.osaka-art-museum.jp>

開館時間=9:30~17:00(入館は16:30まで)

休館日=月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌平日)



交通案内: Osaka Metro 御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または大阪シティバス「あべの橋」下車、北西へ約400m